歌傳秘書

特別
へ4
8072

和歌と詠事かるゝ事
ゝ也たゝ心ゝ
ゝ所多しかを書いこゝて
上手ゝ和ゆえゝ
はゝ秀逸ゝゝみ出ゝ
後ゝ世其乃事
世ゝの言葉ゝけゝ
なゝ人ゝあゝ
やゝと詠歌ゝ
ゝ成ゝ
はゝふゝ

〈96-116〉

道の荒廃ぬべしされいまへさ
きらとくくの得入て欲と
よこふ所をとくもしつるもの
一題と結こんの得へきるす
天象地儀植物動物まへ長
形あくん地をいこと石をとりしへ
しこ十一字れなるる歌の字を
れたるすハかくと是と雖し
ものと他れりもこいとらも
もあるも紅葉浮り
落葉満水

資寺朝臣

いくしよまてもくりしも水上に
いくもくるうう山ぬあくく地
月照水

経信朝臣

もしくもあるるのさうの月
あれ月のりるよまもせて
此二首ハ三月のそこてるる
ほのすれハ歌をいくて多
まかし見とろあるとき後ふ
拾はまして紅葉水なるとうま
ぬも
五月四日の寄合く部云イ

[illegible]
あり[illegible]
世[illegible]ハ[illegible]
詠の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
百[illegible]
等[illegible]
[illegible]
[illegible]

月[illegible]
隣日[illegible]
三日月の[illegible]
[illegible]
[illegible]
我[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

詠とし字ふまつまきて
あつま雅詠ハ一字抹として物ふ
さふせつを

池水書歌

池のといふ嵐の吹とけて
こ月ふ詠ふ初さくらん

半字雅詠をもとめ雅詠とハ
いつくもとよりてんもふ
女子よりてもしまもあ
つ風情のあるかくらんす
ハ證文とし歌

但古集ハ秋歌ふとよ毛庶
とし名せ歌ふ初の中歌ふ
なすいふくしもへ文字し
ふくやもくとを詠をかす
し様をけふとうもへ俳
令朝霞なとあんふあさ霞
と詠し野出とかへの出のね暁
庶とあつふ出ふ久対句とを
如け句東をもとさとちふ
なもとたふ
さく行へし毒ちよ中あ

紙のうしめ紙なるふ朝の行ゝ出
るもんしやうて京のうしめふけ
さのやうなるもうしにあなうら
ようしぬうらの神ゝて寺下し
但雑紙のハ初花のまゝて焼へ
うゝ紙と上白ふつくしうふ
うしうゝ一白ようゝたうし
ようゝ初ゝ花と紙の院百ゝ紙ハ生
てうゝてあ也ハ花なゝ紙乃
寺ぬまゝたうくうゝまゝふ花の
人字のようゝうもんしうゝした

但ゝし一ゝとうゝしむ京ゝや
ゝて初人字のふうゝ入ゝ毫合
ようゝ行へしし
花の紙ハ花ゝとうゝ月ゝ紙ゝ
暁月ゝとうゝ京合ゝ紙ふ
へうゝ暮中ゝと旅宿ゝのうし
紙ハ出ゝこぬゝ物の紙ゝしい
たうゝぬゝとうゝ入ゝ事論なうゝ
や連歌の侍紙のうし但こ花
ようゝうり花ハ出たうゝへゝ花
一ゝうゝ婦ゝふへうゝん

春の秋よ秋の物とうつる秋の
秋ふ春の景物をしきりに
ゆゑ文くに要なり

霞隔遠樹

かすみこそ秋のくるとをしらせ
春はかすもしのしらもての森
此歌は霞をもつて春かすみ
しれなりはを春のりをとこと
こんと作りとしろ秋をもむしい
ゆしを對をしろをもつてあれた
さほ春しるをへし

春かすみこそ霞てしかしてのは
いまをかたりたる世界のよう
新しきみりをようへし里と
かすをるをさしを秋をくれなる
こうしを作をこをしねをくに
泉を秋をそ彩のをれをもむ
人くあり出いつをのをとを
多の秋を
春興秋興いつをしねをさを
しりとをくさしをとをむへし胡
詠は秋よをしをしりり

山居山里

山里にかくしかくるる
へし世の人の野徑世にくちも
はてぬ名の水郷水のほとりに住
住吉川の流れ清くしらなみに
名養ある紙をもとめと異名と
なして庵とするにもとめて草とき
いろいろとなる萩と麻柳草を
ちりんとぬしを捨て堂
紙衣を縁にいうちまもて
伊勢物語に
八重むぐら宿は多くて
人をむかへぬ家は

[illegible]ふの人しる
山ずみ蛭と丈たりこれ元春
の友出ずしてもかりなるよ
むしもなるとも[illegible]
杜冊[illegible]紫菀混の蘭[illegible]
[illegible]ものは異名る
らしいかへ[illegible]
のまこのまこと國名又所の名
乃すよいひ[illegible]
とそもあるは別儀也六帖乃
紙ハかぶ[illegible]

若所とよむしるす書よ文るし
ふる前とよむ仕ふ仕ふ
望てふまんの耳をうんて
ふるかるまし色はてて
深川とうんへのいてうい
いろぬてふものうん
ほくこの郷ふて
とうにさく郷の郷とうんと
ふる山川ふなるふてふるる
其一ふの尚庵の今帰とふ
今ふ景氣ふさふとうむ

ふるし秀ふるふるまし儀たし
ぬまい西祢ふさせ
大方郷ふ名ふをてたん
ふふるるふふるふふ
てふまうふ世ぬへうんと
ふて栗しふてふもてんも
花ふうふ山ふもむをふる世
業ふさ二ふのふふ業ふ世さ
ふんふ兵今ふ二ふふ望て歴
弼ふんふ花しふ業しあふ
景気ふふうふてうむ

さて八幡宮さうを表文に書
してくへさあれかしとの御よ
も今八幡宮の御宮の
うけをかうれしかるべし
しるもうすちとうむてしる
うの御宮の昔より後
うハこうつるとよ
あまとも水のしたもむつ
たりかくハ思ふとも今も
さうもさうしたのとに
なりてもはかてきて

よいし出はへうんのおよ
ひて必ずしへ事ひとの
しるうすハ後に一人のりの
撰集をふもふ入也
一歌したりよりうとうむへよ
根あるふつさう
百そとうもしよう地うとて
くうのおさうう神なるものし
ちうしうとうとうとて
中ふ遠遠出来ぬつよ花とうく
く東中へしさのこんをて

くまし一首給ふへしされはこそ歌
めいそくるとも自然のきすな
き八百首なりしに数くま沈思せ
はるすかはあや三千首六首を
八首よりしによくよみて此歌ま
しるへつれは作者の為よとう
て八能く沈思せへし歌合の事
ハまたに失錯すへくへの難まつは
へつしるすとつて能く見はかは
へしるけしあれ物よもうはま
しかくしすることと讀へし是と

それの事とやめり
山桜咲初しより人のこころ
ふくも舟小見ゆ中の湖の白糸
又凌せつ浪の花つつこかきにしかり
卯花さきそめ玉川の浦の花
あとをこうむ野地の玉川萩にたえて
夏の夜の浪小月やとりの季
雪の嵐八墨の清の木うはませとよせて
月小みえりのあさけのくし山
四季の事ハ松松の気するころよも
へきしんや

京の寺ハ天満宮合ふ
五月五日と名づけ出よりて秋毫
ものやおもしろ人のとまも
新文字合ふ
ほとゝぎす今ハ分ちなし
おもひなれし外言の文
こゝろ〳〵ハ秀歌とて廣為せられ
歌会其外よ
部ムさ合ものゝ言ゝ
ぬるよし花とよあまり物と
ハ寺ハ百寺のゝ九寺とこそ申
歌合よ出来（ふ物よあゝ人みよ
ひし東し同ふ合るし利
見と雖しけ也と寺ハあ
ゝぬよ後拾遺よ也ゝ
加茂のまと名ゝ舞てゝ
一歌のすゝこのゝ
調なゝふ
ハ出てこのゝ也同し風体
本ゝとゝゝ
也ゝりぬゝふ枝木とゝゝ
うゝと雖せらゝハ乗ゝ

たり上ゐをとりよ
してとうをとり面し上ゐを
いつかたのうゑ
をうり安うふかたの一字二
字も耳よりうたり此一字ゐ
をうゑ也まして一ゐをとりかう
ハうをうゐまりとても文く論
あうへうゑ

まし方公しうへう鷹とゐ
年ハゐ也とうも意ハうを仕
山ゑたしゐ文字ゐうてあうや

やむしうう雖しゐり尾され
よ安ゆもいうく元ねうへん
うの川春の山吹ゑうよう
ゑねの保ハ教をてゐうん
山人のむうれ浅ましてハ
むうゆうをうゐ谷風
うたうれうのつうう方は
ゐ浅者をうゐねうこれ狩場
いつもうう三ゑと戸重て修
やゐねこうむまうう神也世
のうゆへゑ元ゑうふ

[illegible]
上下九句ゆへハ[illegible]
日と言ね人ゝ[illegible]山里ハ
[illegible]
日[illegible]ハ遁人[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ後[illegible]の[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]
[illegible]捨遺[illegible]入[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
近代[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

旅人乃袖吹かへす秋風
夕日さしてさ山の端
うつるまで入江の波
[illegible]
かぜの音に秋
よるもまた寒やさ波ふる
志賀浦
[illegible]
こゝかしこ
うらうら人をとゝのふる
[illegible]

[illegible]
世界
[illegible]
山のかなたもなほ遠
さしてさふらふ世をうつて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
しの方ハ時代ハ[illegible]て今の
ハうすのまとゝ
つまさ海ハ波ハ
[illegible]

ましいく勝劣なりとやたり
をよ世うし 基俊 俊頼 顕綱
清輔 俊成なりとはぬるさすらこ
成らゆるしやうこ人
くこそとこのやしは俊成は
るのそこをこのをうむへきに
こそはこうして頼らるかは
つとてさせるるなさ物あり
和歌はなるてこそこうこ京
ちとくいしやゆうしやもろう
歌とうこいうてすうこ絵

ゆゆうて古今より新しくてふ
へしいうもるかるのぬけあ
りそこそうふやゆうふうき
なり左ばしいてこそるけやや
ちくこをうとあへなゆれをよ
きそこあゆこそうこへばこ之
ゆきるうはとうさもそれを謝て
うさこせうをうこそて
をはれうそあるへさとか
やうこうみたるうし之連ア
ちうふのうこさとえ

かゝへてさぬきまてにおちしさせ
申しくたしとかやうなるを
ちなうはゝなるとてくるなる立
く給ふよるのやこもなきは
ころくなかなかやさしうくんと
てまつらるへくとよしなき
あしたてしうらみんとてあまの
またしらふかくみるまつし
たゝぬるさきのとのきさと書
まえて秋のよかくこそなれ
さけ逢はすることてそあれ

わし葉しくへしきさと申
たりは沈みてうつゝてしらいて
にくもおかしく文字よりさるは
まはりうらみちはれとそれな
もよし絵にも詞かきあし
くらんとしとは敦盛くらく
手を取てとらせしうる九郎十郎
ともみえてしくり
上歌 春しいとしやうらみなをよし
ものかはるゝしよ敦盛あはれなり
かのくとあるしの浦のあまの衣

ちからくれりみえてとこそ云へ
すへてよくれしら哥ハ面白ま
取りのこさす（じと）しやめり
（中品）春こそあはと人いたまて驚れ
おりみちこちらハあそしとそ（おもて）
すくれたる下やかのたるやあかる
下もかてたるへこさ（？）なとたつ
（下品）は（哥の）アりそてたへまよりア
世中はさ（かな）さしとよみたと（なき）
一目まる夜なりやこえとせし
これそれらへし古今序よ面出

花のけよやまあらこしゆしたらく
たふハ
かくよ山はさきしろて入てゆえ
しへかうみハ老やしめりゆた
思ひ出て衣しき时なりたれ
すきてまふると人こえてまや
先し下おとや入てゆあり（い）せ将示
しされハ志（いつそまうて）のつ哥なりうさうそ
后へし
故俳の时ゆしけよ其ハ媛（のこと）
是ハさせかるみなさ哥ありまし

めハるのよとしてもかなを道と紙く
うれハのうきうあり見さきあやう
ようしへしゆゑくとうこうし
ほへうこう物をいうこうもいうんと道
ハあそこしたしひらうてうろ
こせもてせしさしさやう
たううあしうくてうこうこうと文
ゆうし祖きくうくいひれとん見
ゆうけきハおりくのうもみな
こを用ようこしてうのうこうこう
うり首のこうハ二首のうちふし序

のうこうようこうすてとうりようこう
と実ゆうしてありう
こうれくうこうこて流をいつこ川
いはみこうこてう高うこうこん
うこのはいうこうこうはうの
こうやくきを人をこひこうてし
を代のこうハうしひこうこうこう思ハ
ようこを点をこのうこうこうこうあ
つこあへうれうこいうこ後のこうとる
のうようこれこうこ半こうとはゆへうこうや
一こうハうこをあふうこうこ事

衣のはしらの舟のはさまに結ぶはたゆる
かやうのもの其をこそもの奥
もものさはりとなりかくいへともも
そさしらるゝかさせあかちよりと
めあはめて教とてさんとしろ
はりとさしなりはいとよはりか
そしゆゝしくるとこれとよ
こへるに秀句のうとこそて入者し
さもよりもなのさ言しあるるよ
しりやうふたこりつのこさも
一文字あまはふ事

させる要なくあまりてやもく
やつとものへうんあるとこそ
入てあまりすこしはふるといふ
あまはりてはうるはまりさはあま
りしらしはさくくあはいくく
しもるゝ
年ぬはしはうれ花ぬしあま
むをみはいはこしはしる
かのくとあるの月見永
ある家吹たるもの山おろしの風
はゝ字ともはいつまもすくれらこの

[illegible]ハ字のあもらるるようてもうくぬへさるあるすきあるやうてけるるゆへるゆくるぶし

一かさぬ詞の事

世人ものうんをあ白くるをへん

[illegible]月の山もの[illegible]

[illegible]秋ハまるるる

いのものいるれあれいるて

[illegible]さ人をいまひとあるん

かくたるんやいあるきれし

[illegible]ゆるいを

これるいあしうるはとまるるはし

もらとぬるるいむるをへるすし

何ものるるるさるるるるるさせへ

ていはして同れ和をるるをれ

いあハさ人のうるれはして風

情のさ和ぬして人を例の

るるいるるるるるるる也

一ハ詞事

いるる古ハるあ人彩の詞を

用へし但ハ今初て

よるるるたるんもあるるへさ

まあらたなるものすがたをかりて
かりて古集にあるいとそしらぬ今人
もものしらぬものともつてきたる物
ものしりてものしらぬ人しかるべし
世かやうのものはまねべからず何
ものしけるこころをもさき
世のものまねして世間の人のよろこ
ばしむる句と見てくま
ものしへしん

春

かすみかねらうぐいすはるかぜ

花のやとる色　風まかせもむ
月のあまさら　かすみをもれつる
雪のうち　元さくらけて
むかしさかりの　花の雪ちる
花ぞ雪ちる　元さくらの　浪よりなる
元さくらの

夏

涼しくも　あやめ葺
夜の夕れ

秋

吹ちらすすき　ゆるもとれん

[illegible]
[illegible]
月やそとせの
[illegible]

冬

月の桂
[illegible]
[illegible]
雪の[illegible]
[illegible]
雲かな[illegible]

加[illegible]て庵の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

不[illegible]の風
[illegible]て出
やらしく[illegible]

[illegible]

方とこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

旅

東の[illegible]雲
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

神[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

月[illegible]ぬの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此ドウ様ちうの木の下風をやうちうのふむしの音をきゝてちうのひうぬんしといまし出たれハかるすし一寸今よかちうへうすおしりの山時雨玉梓の名ゆき人これていの初いくそもしらしふましそれとのそうしうハ音へうこたるの初の論をそもしるきゆへなりう

一古歌とうの事

五月の初をこうるとうんうを

一うこれとうのうの絵こそ桜ようをうこ取ようをうガ

むしの初をもそこ桜山

いくそうこはれあそもあうの

むしの音よりう山の井

あそし人ようしあうこれ

ほうそうこれ初の夜虫乃

月うあまうしあうり

ハしあまハ神よりうとてこ

いくやうのとうへうし

山ハかるすしも取とうを

[illegible]
[illegible]
あしの山桜戸とあをて
[illegible]
名にしる笠置寺
山桜戸のあをを分て
あらてすておしとゝ[illegible]
[illegible]
京都のやつれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
はうこれ自のまへ[illegible]
の[illegible]と[illegible]の歌より[illegible]
[illegible]
古今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ねハ好きたまてこそあま行の文字
まへよ万葉集のころよりなかよ
ましうはくしかりめへきるなれ
やうふしくうして紙詞よろき詞
まじわせてはなのくきさとやさしく花
なましろしあつしき風情よかか
ゆ也三代集より人の心をしはるか
すなすかまかしくて那ら立みてな
らひてめしさるこそぬへきよしくや
あるゆうらてひきすむうなりのなか
心のくすへて新しく東し出した

らんよハるとへて此歌よとも名残より
よとえ此あるかくあるとつるか歌をよかまと
志出来まし事女を執して
よし上て又好を好かたりハ人のかに
ゆしなると執して今ハ我かハ飾恒
貴之よし道をゆかりとれかける
く東しててよよめしさる
ものともあへもとて心をそよあるすし
あけ也けより此の秀事へいてあな
ろうしてる称のへてもあまな
はりりたりよ字淡よりりやい

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此一帖以祝文入道大納言乃為
自筆本令書写校合訖
可為證本矣

右近衛中將乃秀判

此歌一帖以後小松院震
筆御本書写校合畢
前大納言入道藤雅判

此一冊乞又一位祖父栄雅以自
筆本安藤原[illegible]厨依[illegible]
書之者也

天正六年霜月十二日　宣雅

此蘇教一部自南可法師令備
用以重雅自筆本令書写之
令又依干　義延教之作
而雖力無筆君令雖黙令也
写備　言教者也

延寶六戊午年二月廿一日　従位保純